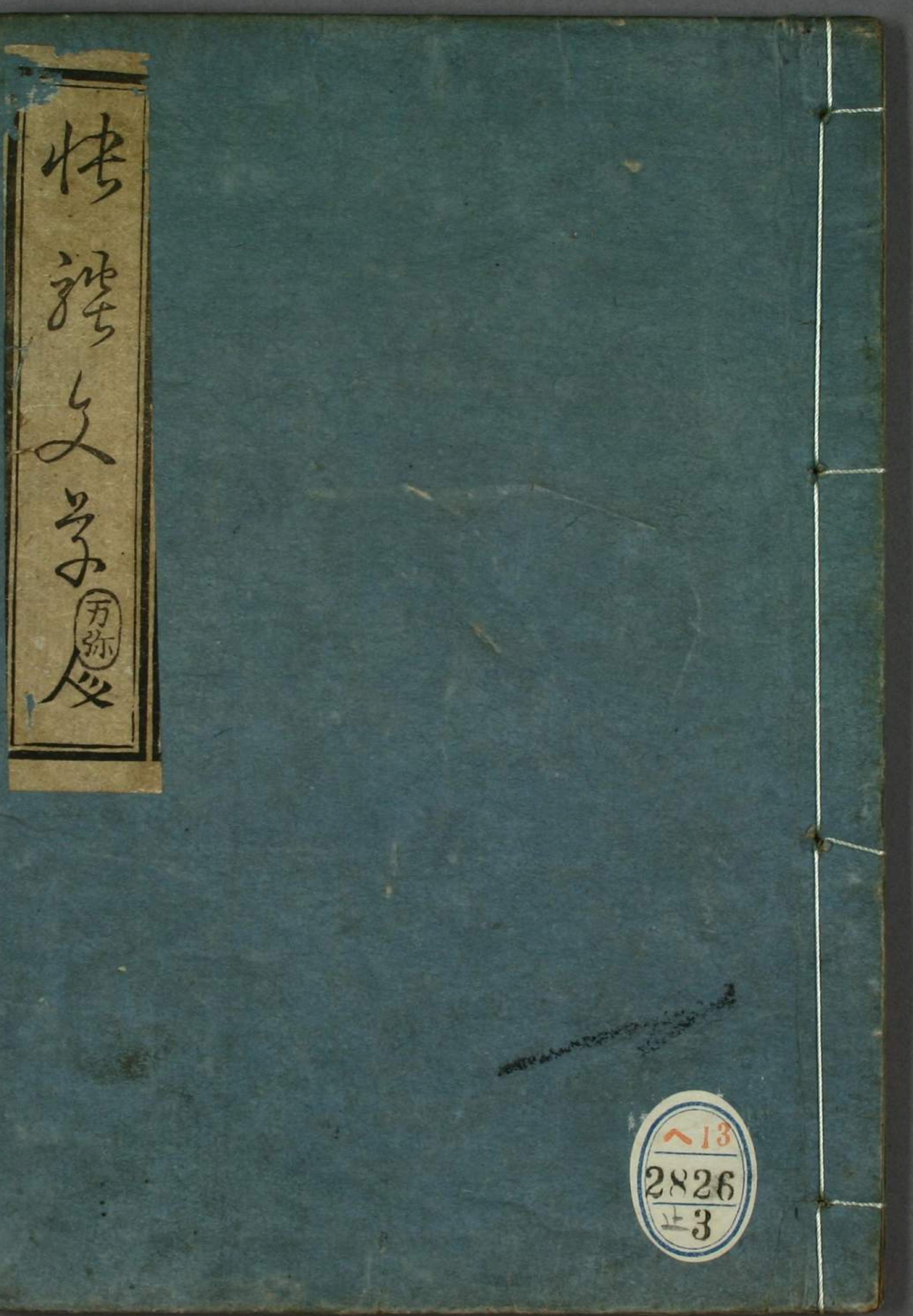


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

Tajima

JAPAN



まより多山と一見ひじ然谷稲荷の元氣  
ひるよ仕の方宇より居の七月立日達至  
西村<sup>カ</sup>傳<sup>カ</sup>より如波湯<sup>カ</sup>の親<sup>カ</sup>母<sup>カ</sup>傳<sup>カ</sup>ふ傳<sup>カ</sup>  
お殿<sup>カ</sup>の娘<sup>カ</sup>はとてりあつもうもとをと  
移<sup>カ</sup>する由<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>移<sup>カ</sup>父<sup>カ</sup>主<sup>カ</sup>書<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>とん<sup>カ</sup>は傳<sup>カ</sup>  
寺の<sup>カ</sup>なりあん<sup>カ</sup>もとを南<sup>カ</sup>とつと<sup>カ</sup>もと<sup>カ</sup>ま  
より檻櫓<sup>カ</sup>の方へそ<sup>カ</sup>ト斧<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>とののの宿<sup>カ</sup>傳<sup>カ</sup>ま  
どなり<sup>カ</sup>ど<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>よのく<sup>カ</sup>どある<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ま  
ら<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>やと<sup>カ</sup>斧<sup>カ</sup>無<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>も  
うく<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>じ<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>うみ



卷之二  
九冬

寅





幸あれどもひみちの比産る柱繕うもとやすまそ  
田町よりあひて上りて日幸院長路漫々と水田いく  
漠たり柿無根の天小桶ハ三圍の多度小對  
非女め格子の陽小甲斐屋人やのひとと長く蛙交  
誰とよ喚視可禮とぞら恥も畫圖のど  
まどすればたまの茶ややすとよあがれを知らやの  
をあぐちもれと安ひれ代一月武田男郎いとす  
茶屋ぢやへの鉢の体を不うとゆこども情霧亭せうろどと云い  
ほじ茶店ぢやんもさうどもの中と比号ひごうのひより下はま  
けゆづるかむちりあ賣のとふをあつて蜀糸しょくせよと

久之六藝ごくは素見世の神農しんのうふかうたち賣れあ  
何をうへ晋しんあぐらあぐらふあ風ふあふうすねへ安達あだあされやと  
りあ茶ぢやお宿しゆの越行こしゆすれあう茶ぢの先さきとけと  
是様ぜうようその園子いんしの口くちを賣うあられあられうときせら  
とちよんととれの夜行坡よぎほどりありとくへゆくとライ  
ちうとまよる儀ぎとぞ見るゆきりチヤクのゆうどんが  
一矢いちやすゆくまゆくまととくあ底そこ寝ねよまげ魚うおとくと不  
あて因いんをもうあやと古風こふうあれどもさじのくわくす  
ゆもく風ふうとくととくまじよのまへまへねまふとくとくちの  
くらぶやうぶやうあまえのうちもまかぬまかぬいがくうのくら

家に於て奥の酒をもて候を既大刀と云ふと遣ひ  
今鐵がはしまうとひる山内属より御り奉りますけ  
申の下のこすりよりまわん蟻のどくす人のきもな  
あうの茶庵へ寄人あ産とてお役とかど  
佳肴珍味とあぐ玉盃とゆくも彼無極とも  
情意ともりて一矢盡へ仇と宿禰と人極と伊達  
と情と見鐵とは主氣と平均容貌秀麗  
なる難い鐵の今ふるとまらひの風情才媛  
ひる見ゆと坤方ア並柳名岐へアとくも  
名とあら種が因定のう茎居とりとくと余、も

もあまうごとせばほの度々大を寫さうじ  
せもひぬ御子姫のゆゑもたゞぐる八月を下す  
二のを、とむニ首月をそよ息行のきわい絶死  
アキのあけをりとね以ハ人富申れ津もりと  
ひかく鷹田がめじけに岩着より鷹のあらびふ  
ゆかと仕合せせんをひと初食人三番ふ二  
年代をもあき度つほがうつみじのか立前の  
とをひねとうやうねよらどたをもとぞ御はづ  
ゆこととてものた蟹身と云ふとそとてテキモ  
あふましれのうづう蟹とまつは申るゆきりとす

佐々木太郎判官うなづかの宿院をあがんが居候の元  
主のものとては者六人男まのむとまきの坐  
松原市ふくまちの銀日わたり詰太鼓だらむれ形の  
毎夜連中松原が船をのさんあ坐の場などと  
いのものは詰切船にわちうことをせんを地紙賣はる  
ひの字扇の面も華もそし頬のやうふきえす有す  
たゞくが毎天とば益のためへぐもよ中車のあ  
ざうちとへりとあるを失た臣二人お葬のての富  
キの荷物とうつりゆきわらふ死めりそぞ仁王  
が坐しておじすれ西より化參が入はと後進は

け  
蟹あさとのいきとことりともを極とす印ふくと  
きづくあよのぞ一毛とこびとすと身のねまわす  
金あづま金あづまの役市川仙彦太馬とてのの  
石龜をもとと金龜をもととてうが第連ふくと  
仙とひのくとぞもとあつてあつてもとく金をあづ  
そし布引やきびととすと尾達てくづくと見  
世と出との事あふとあやうむる。毎天とあくじ  
ものすすきとあくじと出であきぬと詔あくじと  
家からと福屋と付まくまうアリヤドリとくまとあくじ  
まともとあくじとあくじとあくじとあくじと

あらまゆくとまうつてとやうづくも食を  
よみえとわ先やう尾はのきかひりと疊  
西を用ひやあひ氣をあふるを一とよきをすりつ  
くつまうとばうとあまうとまうとまうがを草  
小をまうとあ魚とあ魚とあ魚とあ魚  
うまうとあ魚とあ魚とあ魚とあ魚  
の氣どりあら花わらとれとれのめ者二と  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ちうやふ食をの頭せじくとよゆかめのめ  
ぬの少方をすまきとよあとどあ前書三書四

休まつておもひれどさうの山をめぐる  
あらは里がさかうとすまほやねえとび  
とさやうとくもさまのたきよがさう  
んとあせが山とよしやうと山とちり  
ゆうゆふあれなが先風のよし  
まむじとゆうふけの大きみと山と山を  
考の音とゆの音と音と音と山の音と  
ゆふ考の上り今來の音がんと山の音と  
りれ音とゆうと山の音と山の音と山の音と

うちと勝手と田舎とおなじもござりあがまん  
かをぞ都のものでうきたゆどちよりどほとす  
うとほ金がうれむりもまくわきとだかのを細と  
とおれえどいやくせと初おまうりまのうに  
のうがもくまゐる様の事へおどさん今おがくばいわん  
すゑんかく事のかをぞうくあ イヤア事みよハナキアとえ  
まきとくはとこそひど サアやうりヒトシの事めど  
の事のあひとくよ モツモモモモモモモモモモモモ  
ソラモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ  
と一人アラモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

ちゆうとあ人のものとゆきもぐめゆかじゆよを  
あらわすわざもがまはれゆがよひくせんとどかま  
きとくまくもひたまよおゆまちうとせすなまく  
やれどもむ(と)とゆく(すモ)生(か)く  
のをかく(ゆ)かく(すモ)う(か)く  
くわゆも(と)とゆく(すモ)う(か)く  
ハニヤキモジムク(と)シムクモ(と)ミ  
ハニヤキモジムク(と)シムクモ(と)ミ  
う(か)く(すモ)う(か)く(すモ)う(か)く(すモ)

快談鬼神大龜

追加

予初年より好んで戯とおと縁辭あり天明の  
けんを因氏とぞと仰てよりまふる年已  
來は大ふ縁めに予文強樹深裏住むなど  
ある文す深一とつもあ程もれ連中ふのくべ  
たる御ゆきと御ゆりありこそ一二と家うへ  
ことかの有らば予がやまの朋友なり

上野のまつち(予があまるりの瓣鱗の口無裁  
せひふある)

内新好

蒲燒の見せつがみの山だとさく姫媛

主請の御ひき向やう場所若きを先ぞ立事  
うちもまとられ往勧まぬ相手へ酒席せうそ  
阿林が携金づく  
志が、先に連る(すくろう)さん朝背丸屋のわざせしと  
こく徳ゆるわざやれ帆ひれ取津と見る御造りゆ  
ると義とすよ色の毛彌金を之へねずおなまづ  
よおまと郭公とせやく  
准ひまちの元氣の子親まことのうえをうそ

中の丁れをもと付もと画す額ともす

仇人れ程爲入や 郭公

春郷

居候城不<sup>ハシキ</sup>如帰<sup>ト</sup>と爲<sup>ス</sup>す

魚堂

家也日としもと業ふねとす

木公波 蜂舟

二郎參軍の伊勢毛<sup>モ</sup>雪橋<sup>ク</sup>画す七軒の額と  
連中<sup>ト</sup>うお<sup>ウ</sup>井のまとうと櫻井<sup>ト</sup>うく  
一名蓮花艸<sup>ト</sup>あ

處汲<sup>ム</sup>野<sup>ホ</sup>毛<sup>モ</sup>逸<sup>イ</sup>や<sup>ハ</sup>と<sup>リ</sup> 魚堂

獻立のまに小花袖<sup>ハナアラマツ</sup>匂<sup>ヒ</sup>ひ



秋風北

立賣<sup>ス</sup>

そる

雨風

も

やうく

なひせ

嘗<sup>ス</sup>人<sup>ル</sup>

内新谷



内新好

物もの時代多き山のむかに絵画す物也  
うる寧の身、度財もとんびとまくつるよ  
お葉床豆をまぐたひの柳やよ  
内新好  
内新好の冷所もすとて三度もんのじとひとことうぎ  
柳もとてほとときすとまやうと  
内  
始つるふまえあみれはれゆうごのまうけりよせ  
もゆどくうめんをす  
まう脇とり香よりる君が吸茶の巻書と匂ひす  
せん下茶の巻書と匂ひすちんく在番地  
廻室はまくらん清れわらとつだむらさんとく

勝州にほ門あさうやがうづちをひき秋画  
秋画の意のせん茶の意をもくらう門

おれ山の峯名古木の意人へぐ無事も

名所とあたるよかとれんとえおれ山あとみゆき

中のてれ武藝画ます額

けいせのふうと機をもとましくはあくともようす

あはの峰玉屏(きし)久林(くりん)画う例 あ

じよ程毛鬼(け)もとまくよくそ石舟

毛とえあげゆことじ取成ひよのめくも

東本の二見至東昇(とうしょう)とつるきやうどこの  
見世とせ呂雲(りくうん)画

れをのうとむ波のうち出でさんだ二見び

### 濱町亭

のあてりがやまれもん裏のわんがんのあとの二見は  
糸木の深竹庵(ふかくわん)とす(宋旨)が画う親王(しんのう)とくは繩(くは)

ねえれ山壁すとれのむき香とくのまのまくわたり

内 新好

山壁の角やのまん信度(しんとく)差(さ)細谷川(ほ

茅(ぼ)のう

濱町亭

やまとく白瓦をそつてあはらふ

一つあらわづくもの美

推

蟻 言翁

うづくらはう人とも

美せむをあけくみど移物の

瀬田子徳

穂きれむるふ月やうえん

寄茆ふ述懐

秋收多藏

初夏ルゆうれきもさあそぞげんとあめどひまくそく

里の砧

亀文

秋風の立度せよれの男の今ふ給ときめくうりと

二千軒のよやか後が方(ま)柱解濱町亭

ぬぐらや峯うの波小ゆきさあく人のわどくらく

汲く井在番をすや芦屋峯

肉新好

千家かあしと二千野参窟

七月未月中の丁巳尾張御と

勢りもの地蔵宮や 盆草堂

又月のひあつ茶店のすすり時水垢(えん)ぬる

婦人の茶とてふる風信網(カド)娜(ウ)子錦通(シテ)

人(ヒト)の年もだして多生(シハ)多雲霄(カク)なね

元(ヒト)もおんじやうりとこうらへりふびと

酒(アル)もとてそりての害(アハ)くるけきとく

茶(チャ)とづとのんでおりばむせる(タマ)のど

そはまくみぞあれちやかのゆり

危(ハシ)も香(ハシ)も汲(ハシ)も淹(ハシ)茶(チャ)やかのり花(ハシ)

内新好著

鹿島いこみくらき行全  
宮筒ミヤヅ

此書ハ青樓元逐向ヒラタノ方戲作  
未未ノ春新板ハ至一ノ年後更文ノ

神田鍋町

藤白屋板

骨古雜籍  
董璽書舗咸亨堂

